

生命維持・食産業としての生業

宮城海区漁業調整委員 赤間廣志

出来秋、将に今が日本の美味しさを満喫できる。「みちのくの秋」は、「さなぶり」や収穫祭で賑わっている。三陸の海ではサンマ漁と秋鮭の水揚げで賑わい活気づいている。

平成23年3月11日、東日本大震災巨大津波が三陸沿岸の浜々を襲い、一瞬にして漁家・漁業者の生業が再起不可能かと思われる程までの未曾有の被災を受け、漁業に携わる人々は呆然自失に陥ってしまった。あれから4年半が経過した今、三陸の浜々は不死鳥の如く立ち上がりつつある。三陸特産の代名詞でもあるワカメは大震災以前に迫るまで生産量は回復した。牡蠣・海苔・銀鮭も然りである。過去に幾多の津波に襲われ、その度に先人達は津波の破壊力に慄きながらも、畏敬の念を抱き海と共に生きてきた。知恵を海から学び、生業を成してきたのである。そのDNAは、脈々と受け継がれてきている。

漁業も農業も、気象・海況という自然条件を巧みに利用する自然装置産業である。農業・漁業を営んでいる多くの方々から、毎年一年生だとの声を聞く。昔から天変地異、火山の爆発や長雨・台風による大洪水、そして津波等。最近では、異常気象とか地球の温暖化現象と、自然装置が揺らぎ生業が揺さぶられている。それに加え、地球規模のTPP経済戦争が生業の装置を人為的に壊そうとしている。戦前もそうであったが、常に国家・国益という大義名分に振り回されている。漁家も農家も生産の安定を願っている。価格安定も同様である。家族という核のなかで生業とする農業・漁業を営む人達の願望であるのだ。

国会で安保法制が論じられてきたが、有事の際の国内食糧流通備蓄について全くと言って良い程、論じられる事はなかった。軍事に

おける兵站を言うのではなく乳飲み子から老いも若きも、有事の際に国民が食べる食糧をどうするかである。御承知の通り、食糧自給率は先進国と比較すれば最悪である。喰う物も喰わない(国内産食糧)で、輸出産業オンリーで売る事だけを優先している。我国は、農業・漁業を犠牲にしての産業構造ではなかろう。

近年になって、大学の農学部や水産学部の名称に科学や生命の文字が加わり、更に大学院の研究科が多様多岐に亘ってきている。農業・漁業が単なる一次産業から生命維持に関わる食糧供給という産業構造、すなわち名実伴う第一の生命維持産業へと、最高学府と産学連携を進める機会が到来したことが感じられる。

先に、農家も漁家も生産の安定を願っていると同時に、価格安定も願っていると述べたが、これまで豊作貧乏とか大漁貧乏を幾多も経験してきた。「収穫の喜び」もつかの間、取れた収穫物を売らずに処分する「収穫の悲しみ」は辛いものである。農協も漁協も事業の大きな柱に、共同販売事業がある。米が代表的であるが、その根源は食糧難の昭和20年代から昭和30年代にかけての米不足の時代、米の横流しや闇米等に対し、政府による不正流通を防止する為の集荷事業であった。政府に頼れば販売努力は不要、との考えが農家・漁家そして農協・漁協にも当然となってしまったのか。それは兎も角として、これからは、生産者の為になる販売事業として、国民の為にも需給バランスのとれた、売れる農産物・水産物は必須である。生産コストを上回るだけではなく、手塩に掛け光り輝く美味しい生産物でなければならない。

(あかま ひろし)